

2 吉橋の月待塔と女人講および子供主体の石造物

藤 由美

1. はじめに

八千代市吉橋のムラの講による代表的な石造物として、すでに報告した庚申塔と出羽三山塔のほか、二十三夜塔や十九夜塔などの月待塔、子安塔などがある。中でも、尾崎大師堂境内の勢至菩薩立像を刻む寛文8年(1668)銘の二十三夜塔は『房総の石仏百選』(注1.)にも選ばれた逸品であり、高本国蔵院の十九夜塔の如意輪観音像2体もその優美な像容が目を惹く。

月待塔は、月待行事を行った講中が供養の記念に造立した塔で、特定の月齢の夜に集まる月待講として、旧暦23日の夜に集まって月の出を待ち勢至菩薩を礼拝する二十三夜講や、19日に女性たちが如意輪観音を祀る十九夜講などがある。十九夜講は、江戸前期末から江戸中期に千葉県北部で盛んであったが、江戸後期から近代にかけて子安講に変わり、子安塔を建立するようになる。

本会石造物調査チーム(注2.)は、吉橋の月待塔・子安塔のほか、対象を多くの村びとが結縁した念仏塔や地藏像塔などにも広げ、二十三夜塔9基(推定を含む、以下同様)、十九夜塔18基、二十六夜塔1基、子安塔8基、念仏塔2基、仏像供養塔2基、供養塔1基の計41基を調査した。そして台座などに彫られている人名銘文の読み取りも合わせて行った結果、女人講により十九夜塔が建立される以前にも、女性たちによる日記念仏塔が男性たちによる二十三夜塔と同年同日に建立されたこと、また子供が主体となった地藏像塔があったことなどが浮かび上がってきた。

本稿では、今回調査した41基のデータを表1.と表2.で、そしてこのデータからわかった石造物の特徴と変遷、そしてムラの人々の信仰の姿を報告する。

2. 女性主体の日記念仏塔

表1.と表2.のNo.1は、冒頭に書いた尾崎大師堂境内の二十三夜塔で、像容が優れているばかりでなく、寛文8年銘は八千代市で最古、千葉県内でも早い時期の二十三夜塔である。この尾崎大師堂には、同じ寛文8年10月10日銘の地藏菩薩立像を刻んだNo.2の日記念仏塔があり、願文の「右地藏菩薩者日記念仏供養成就処 吉橋村施主敬白」は、No.1の「右勢至菩薩者廿三夜待開眼成就所 吉橋村施主敬白」と対を成す。

No.1の蓮台には男性18人の名前が、No.2の蓮台には「なつ」など女性16人の名前(判読可は13人)があり、No.1の二十三夜塔は男性の講、No.2の念仏塔は女性の講により同時に発願され、同日に開眼供養されたと思われる。

男性と女性のふたつの講により2基同時に建立された事例は、寺台公会堂(勢至堂跡)に元禄5年(1692)2月23日に建立されたNo.3の二十三夜塔とNo.4の念仏塔にもみることができる。前者は、男性名22人、勢至菩薩像を刻み、造立目的は「二十三夜開

眼供養」。後者は女性名 30 人、像容は聖観音像、「日記念仏開眼供養」を目的とし、両者の願文と経文の形式はほぼ同じである。

No.2 と No.4 の供養目的の「日記念仏」とは、月々の決められた功德日に講の人々が集まって唱える念仏のことで、日記念仏塔は、江戸前期から利根川流域に多く分布し、千葉県最古は香取市南下宿善光寺墓地の万治 3 年（1660）の宝篋印塔である。（注 3.）

八千代市内ではこの 2 基と、二十三夜講と日記念仏供養の両目的で建てられた萱田長福寺境内の寛文 9 年銘の三層塔が該当する。（注 4.）

寺台では元禄 9 年に、No.5 の「十九夜念佛」銘の十九夜塔が女性名 44 人で建立されるが、それ以前の元禄初期ごろまでの女性たちは、日記念仏などの念仏講に結衆していたこと、そしてその供養塔を男性の講の二十三夜塔と同時に建立していることから、当時のムラの女性の地位が、信仰面では男性と同格であったことと推定できる。

2. 二十三夜塔と二十六夜塔

吉橋の二十三夜塔は No.1 と No.3 のほか、『市史』の表では、高本に 4 基（No.16・24・30・34）、尾崎に 1 基（No.19）があるが、ほかに No.8 の寺台の享保 2 年（1717）銘と、No.9 の高本の享保 2 年銘の勢至菩薩像塔も二十三夜塔である。寺台の No.8 は、願文が不鮮明で「二十三夜」の銘が読み取れないが、建立日が「廿三日」であることと、勢至菩薩の浮彫があり、男性 14 人の名前が連ねてあることから二十三夜塔と推定した。

また、高本の No.9 は、銘文が不鮮明であったので、拓本をとったところ、「二十三夜」と「二世安楽」の文字が読み取れたことにより、二十三夜塔に分類した。

この享保 2 年以降、吉橋の二十三夜塔は「奉待二十三夜」か「二十三夜塔」と記した像容のない文字塔となり、No.34 の高本の明治 43 年（1910）銘まで建立が続く。その中で、高本の寛政 6 年（1794）の No.16 の銘文は「南無妙法蓮華経奉勧請 二十三夜 大月天子 擁護 位光山二十一世日健(花押)」とあり、日蓮宗系の題目と願文を刻んだ二十三夜塔であった。大月天子を本尊とする日蓮宗系の二十三夜塔は、中山法華経寺旧神保領の八千代市内の小池や島田、平戸に分布する。高本にも、日蓮から鍼灸術を伝授されたという Y 家ほか日蓮宗の家もあることから、このような二十三夜塔もあるのだろう。

また、高本には No.33 の明治 28 年（1895）の二十六夜塔が 1 基ある。二十六夜待は愛染明王を本尊とし、二十六夜塔は市内では米本や大和田新田などに 13 基ある。近現代の大和田新田上区の二十六夜塔は女人講による造塔である（注 5.）が、No.33 の二十六夜塔は人名などなく、その性格は現在不明である。

3. 十九夜塔と子安塔

八千代市内での十九夜塔は、寛文 11 年銘の村上正覚院の丸彫の如意輪観音像塔を初出として 121 基あり、寺台の元禄 9 年（1696）銘の No.5 は 6 番目となるが、聖観音像

を主尊とする十九夜塔は市内唯一である。これ以後、高本、花輪、尾崎で盛んに如意輪観音像の十九夜塔が建立されていく。

中でも、高本の No.15 の寛政 6 年 (1794) 銘と、No.20 の文化 13 年 (1816) 銘の 2 基は、六臂如意輪観音像の像容が優れている。特に後者の宝冠の冠帯が肩に垂れて衣の裾が放射状に開く優美な姿は、文化 10 年前後に船橋市西船など千葉県北西部に流行したスタイルであった。(注 6.)

「十九夜」の銘はないが、如意輪観音像塔で、十九夜塔と推定されるのは、No.21 と No.28 である。No.21 の花輪の天保 3 年 (1832) 銘の如意輪観音像塔は、台石がないが、No.17 の寛政 12 年の「十九夜講中 三十四人」銘の十九夜塔の下に「十九夜構中」銘の台石が埋まっていて、台石の大きさや書体から No.21 の台石と推定される。

No.28 の高本の文久元年 (1861) 銘の如意輪観音像塔も、台石に「構中 二十人」とあるだけで「十九夜」の銘はないが、女人講石造物群に祀られていることと、この時代の如意輪観音を主尊とする講は十九夜講しかなく、十九夜塔と推定した。

また、No.39 の尾崎の損傷の著しい十九夜塔の「□保十年」銘は、像容と銘文から天保 10 年ではなく、享保 10 年 (1725) が妥当と思われる。

以上の推定を入れて吉橋には、寺台 3 基、花輪 4 基、尾崎 5 基、高本 6 基の計 18 基の十九夜塔があった。うち一番新しい十九夜の銘のある石塔は、No.32 の高本の明治 20 年銘であるが、像容は如意輪観音像ではなく、この時代を反映した子安観音像である。

江戸後期から女人講による石塔は、十九夜塔から主尊が子を抱く子安像塔に変わり始め、近現代は、十九夜塔の銘を残す No.32 も含め、すべて子安像塔となる。

吉橋の子安塔 8 基のうち、初出の子安塔は、寺台の明和 9 年 (1772) の「子安大明(神)」銘の石祠で、八千代市内では文化 11 年 (1814) 米本林照院に子安像塔が現れるまでの子安塔は子安神を祀る石祠であった。

その他、子安講が建立した石塔として、花輪の No.36 の供養塔がある。大正 10 年銘の角柱型のこの石塔は、もとは花輪川の畔にあり、萱田に 3 基ある供養塔と同様に、水辺で行われた民俗行事「流れ灌頂」にかかわる産死者供養塔であった。(注 7.)

4. 子供主体の地藏信仰行事の石仏

高本の No.10 の元文 3 年 (1738) の宝珠と錫杖を持つ小型の延命地藏像塔には「郷中子共二世安楽攸 三月吉日」の銘があり、子供を主体とした地藏尊供養の石仏ではないかと、風化が著しい蓮台部分の拓本を採って見たところ、「己之助・辰之助・丑之助」ほか「助」のつく名前が読み取れた。

またその左隣にも同様な延命地藏像塔 (No.40) があり、台座に幼名と思われる「長太郎・辰之助・丑之助・長十郎・幻永童子・おいわ・六之助・七之蔵・己之助・長吉」の銘があり、造立年月日や願文などの銘を欠くが、No.10 と同一名もあり、時期を前後

する頃の同様の性格の石仏と判断した。

この2基は、「花見堂」の銘は欠くが、18世紀に千葉県北西部に分布がみられる「花見堂地蔵」に類し、子供主体の地蔵信仰行事の主尊だったと推定される。花見堂地蔵の特徴は、①小型の地蔵像に「花見堂」などの銘がある、②造立日が三月三日や三月吉日が多い、③「童男童女」「子供中」などの子供が関わる銘があるなどとされる。(注8.)

5. まとめ

今回の調査では、月待講や女人講にかかわる石塔と子供主体の石仏について、台座などに刻まれた人名を読み取り、造立当時のムラの男性・女性・子供それぞれの信仰の姿を明らかにできたと思う。とくに江戸前期、女性主体の日記念仏が男性主体の月待信仰と並行して独自に行われ、高額であったと思われる供養塔を、男性と女性がそれぞれ同日に建立していることから、ムラ内の信仰生活においては、女性の地位が男性に肩を並べていたことと、江戸中期に、子供の信仰行事が大切にされ、そのための石仏が造立されたことなどは、あらためて認識できたことであった。

注1.『房総の石仏百選』房総石仏文化財研究会 1999年

2. 石造物調査チームには、蕨由美・鈴木千代・牧野光男・中島和子・藤村誠枝・宮井雄二・稲山隆子・菅野貞男・畠山隆会員が参加、蕨がリーダーを務めた。
3. 2015年9月20日に房総石造文化財研究会の早川正司氏のご案内で、現地で確認した。
4. 萱田長福寺三層塔については、第2層正面に勢至菩薩を浮彫りし右面に「廿三夜講」、左面に「日記念仏供養」、龕室の第1層(最下層)左面には「本願花嶋七口兵衛一結施主」「定宥…長十郎」など33人の男性が、右面には「一結施主 女中衆」として「おつる」など24人の女性、裏面には建立発起人とみられる『宥秀』ほか3名の村人が名を連ねている(注7.)が、第1層が表裏逆に据えられている可能性も否定できないことから、二十三夜講と日記念仏の主体が、男性か女性かのどちらかは判断できない。
5. 蕨由美「民俗行事にみる旧村の伝統と新しい街・大和田新田の姿」『史談八千代』32号 八千代市郷土歴史研究会 2007年
6. 蕨由美「女人講と石造物-浅間内遺跡出土の十九夜塔の考証」『史談八千代』38号 八千代市郷土歴史研究会 2013年
7. 蕨由美「八千代市萱田の石造物にみる女人講の姿」『史談八千代』36号 八千代市郷土歴史研究会 2011年
8. 木原律子「印旛沼西部における花見堂地蔵」『房総の石仏』21号 房総石仏文化財研究会 2010年

表 1. 吉橋の月待塔と女人講および子供主体の石造物一覧表

No.	分類	市史 No.	所在	造立年月日	西暦	像容	形状	銘文（建立年月日・☆の人名を省略）
1	二十三夜塔	二-2 -1	尾崎	寛文 8・ 10・10	1668	勢至菩薩	光背型	右勢至菩薩者廿三夜待開眼成就所 吉橋村施主敬白 (☆男性 18 人)
2	念仏塔	三-1 -1	尾崎	寛文 8・ 10・10	1668	地藏菩薩	光背型	右地藏菩薩者日記念仏供養成就処 吉橋村施主敬白 如誦願○ ○應禪○ (☆女性 16 人)
3	二十三夜塔	二-2 -3	寺台	元禄 5・ 2・23	1692	勢至菩薩	笠付角柱型	⑫奉建立石佛一躰彫刻廿三夜開眼供養現當二世悉地成就 乃至三千百億無數刹界含識有情同至樂岸敬白 以智恵光普照一切 令離 三塗 得無上力 (☆男性 22 人)
4	念仏塔	三-1 -6	寺台	元禄 5・ 2・23	1692	聖観音	光背型	⑪奉造立石佛彫刻日記念仏開眼供養二世安樂攸 弘誓深如海 侍多千億佛 歴劫不思議 發大清淨願 結衆敬白 (☆女性 30 人)
5	十九夜塔	二-1 -6	寺台	元禄 9・ 10・吉	1696	聖観音	光背型	⑪奉修十九夜念佛結衆成就所 (☆女性 40 人 男性 1 人 不明 3 人)
6	十九夜塔	二-1 -11	寺台	宝永 3・ 10・吉	1706	如意輪観音	光背型	⑪奉造立真○十九夜念佛 ○為二世安樂 (☆女性 36 人)
7	十九夜塔	二-1 -16	高本	正徳 5・ 11・吉	1715	如意輪観音	光背型	⑪十九夜念佛講中 十四人 (☆女性 14 人)
8	二十三夜塔	五 -56	寺台	享保 12・ 1・23	1727	勢至菩薩	笠付型	奉造立勢至菩薩一躰○中三○二世安樂 (☆男性 14 人)
9	二十三夜塔	五 -57	高本	享保 12・	1727	勢至菩薩	笠付型	高本村 廿三夜 二世安樂処 施主敬白 (☆男性 20 人)
10	仏像供養塔	五 -70	高本	元文 3・ 3・吉	1738	地藏菩薩	光背型	⑪奉造立地藏菩薩尊像 郷中子共二世安樂攸 (☆子供 7 名)
11	十九夜塔	二-1 -30	寺台	宝暦 9・ 10・吉	1759	如意輪観音	光背型	⑪奉造立十九夜供養塔 同行十八人

12	子安塔	二-4 -6	寺 台	明和 9・ 11・吉	1772		石祠	子安大明口
13	十九夜塔	二-1 -40	花 輪	安永 4・ 12・吉	1775	如意輪觀 音	光背 型	①奉造立十九夜花輪講中
14	十九夜塔	二-1 -41	尾 崎	安永 7・ 2・17	1778	如意輪觀 音	光背 型	①吉橋村尾崎十九夜
15	十九夜塔	二-1 -48	高 本	寛政 6・ 11・吉	1794	如意輪觀 音	光背 型	①十九夜講中 三十五人
16	二十三夜 塔	二-2 -13	高 本	寛政 6・ 11・吉	1794		山状 角柱 型	南無妙法蓮華經奉勸請 二十三夜 大 月天子 擁護 位光山二十一世日健(花 押) 高本村講中 (☆男性 12 人 女性 1 人)
17	十九夜塔	二-1 -52	花 輪	寛 政 12・ 11・吉	1800	如意輪觀 音	光背 型	①十九夜講中三十四人 吉橋村花輪 (台石は No.21 の台石か)
18	十九夜塔	二-1 -54	尾 崎	享和 3・ 10・吉	1803	如意輪觀 音	光背 型	①奉造立十九夜講中善女四十八人
19	二十三夜 塔	二-2 -24	尾 崎	文 化 10・ 11・吉	1813		駒型	②奉待二十三夜 (☆男性 37 人)
20	十九夜塔	二-1 -63	高 本	文 化 13・ 11・吉	1816	如意輪觀 音	光背 型	十九夜講中 廿三人
21	十九夜塔	五 -42	花 輪	天保 3・ 11・吉	1832	如意輪觀 音	光背 型	奉造立如意輪觀世音 (No.17 の「十九夜構中」はこの台石か)
22	十九夜塔	二-1 -72	尾 崎	天保 5・ 11・吉	1834	如意輪觀 音	光背 型	①十九夜女人講中
23	十九夜塔	二-1 -73	高 本	天保 9・ 3・吉	1838	如意輪觀 音	光背 型	十九夜
24	二十三夜 塔	二-2 -34	高 本	天 保 12・ 閏正・吉	1841		駒型	奉待二十三夜 (☆男性 13 人、母 2 人)
25	子安塔	二-4 -26	寺 台	天 保 13・	1842	子安觀音	光背 型	當村講中

				3・吉				
26	十九夜塔	二-1 -78	花 輪	弘化4・ 2・吉	1847	如意輪觀 音	光背 型	①十九夜
27	十九夜塔	二-1 -84	尾 崎	文久元・ 11・吉	1861	子安觀音	光背 型	十九夜 尾崎台 講中
28	十九夜塔	五 -49	高 本	文久元・ 11・吉	1861	如意輪觀 音	光背 型	構中 二十人
29	子安塔	二-4 -57	花 輪	明 治 18・ 12・吉	1885	子安觀音	光背 型	
30	二十三夜 塔	二-2 -47	高 本	明 治 18・ 11・吉	1885		駒型	二十三夜塔
31	子安塔	二-4 -58	寺 台	明 治 19・ 3	1886	子安觀音	光背 型	
32	十九夜塔	二-1 -91	高 本	明 治 20・ 12・	1887	子安觀音	光背 型	十九夜 女講中
33	二十六夜 塔	二-3 -9	高 本	明 治 28・ 5・吉	1895		駒型	二十六夜塔 講中
34	二十三夜 塔	二-2 -52	高 本	明 治 43・ 4・吉	1910		丸頭 型	二十三夜塔 当村講中
35	子安塔	二-4 -83	寺 台	大正3・ 1・吉	1914	子安觀音	光背 型	子安講中
36	供養塔	四 -3 45	花 輪	大 正 10・ 2・吉	1921		角柱 型	(梵字キヤカラバア) 檀波羅密大慈大悲 一切衆生 為塙区代々産死者万霊菩提 也 塙区子安講中建之
37	子安塔	二-4 -109	尾 崎	昭 和 11・8	1936	子安觀音	丸頭 型	尾崎子安講中
38	子安塔	二-4 -136	花 輪	昭 和 43・11・	1968		自然 石	子安觀世音 講中一同 明治百年記念 消防団壱万円 婦人会五千元 老婆連

				10				中五千円
39	十九夜塔	二-1 -118	尾 崎	□10・ 10・吉	1725 頃?	如意輪観 音	光背 型	十九夜尊□二世安楽也 善女人同行四 拾五人
40	仏像供養 塔	五 -90	高 本	年欠	1740 頃?	地藏菩薩	光背 型	① (☆子供 11人)
41	子安塔	二-4 -144	花 輪	□・4・吉	1840 ~60	子安観音	光背 型	子安観世音

(注)

- 「分類」は、推定を含む。(推定理由は本文参照)
- 「市史 No.」は、「石造文化財」『八千代市の歴史 資料編 近代・現代Ⅲ 石造文化財』 八千代市史編さん委員会 2006 年の分類と番号を示す。二-1=十九夜塔、二-2=二十三夜塔、二-3=二十六夜塔、二-4=子安塔、三-1=念仏塔、四-3=日蓮および日蓮宗関係供養塔、五=仏像供養塔
- 「所在」は、尾崎=大師堂、寺台=公会堂(勢至堂跡)、高本=農業協同館(通称・国蔵院)、花輪=花輪公会堂(来福院跡)を示す。
- 銘文欄の○数字は梵字で、2.の『市史』付録の凡例による。①=カ、⑩=サ、⑫=サク

表 2. 人名銘の一覧表(表 1. の銘文☆印)

No.	人名 銘文
1	○○○○ / ○○助 / 勘平 / 三兵エ / 二兵エ / 作左エ門 / 長五郎 / ○○平 / 久三郎 / 太平 / ○○○ / ○○○ / ○○○ / ○○○ / 吉(玄?) 右門 / 市右門 / 七平 / ○○
2	なつ / 松 / なつ / ね○ / きく / おます / お久 / ○○ / おかめ / ○○ / ○○○ / おたけ / いね / おたけ / ふさ / おつた
3	法原 / 道盛 / 道祐 / 浄故 / 道盛 ----- 本願 仁兵衛 / 筆書 才兵衛 / 内蔵助 / 三郎兵衛 / 加兵衛 / 三左門 / 九郎兵衛 / 次郎兵衛 / 長十郎 / 半右門 / 北市 / 九兵衛 / 助右エ門 / 忠右エ門 / 勘兵衛 / 長兵衛 / 善兵衛
4	明珍 妙秋 妙栄 妙安 / 妙秀 / 妙信 妙照 妙光 妙印 ----- おとら / お○る / おたけ / おつ○ / ○○る / おくめ / お女○ / お○二 / お(欠) / (欠) / お○ / お女 / お収女 / おか○ / おせ○ / おち○ / おと○ / お○ / お○ / お○ / お○ / お○
5	妙連 妙珍 妙向 / 妙秀 妙喜 / 妙清 妙貞 おとま まん女 お七 おい奴 おかつ / 妙清 藤右エ門 おたけ お度 おさ おひめ おふく / 道教 妙遍 (欠損) 妙夷 おまん およ お志 おひつ ----- 小女 おつた おたみ / おたけ おつる / おつた / お女郎 ○房 / おまる / お女 おたん / おミニ / ○人女 / 小女郎 おき / お○○ ○○

6	〇〇 / お〇〇 / おかよ / お〇 / お花 / お長 / おつま / おい〇 / 妙道信女 / 妙竜信女 / 妙思信女 / おまつ / おたけ / お〇 / 〇〇 / 〇〇 / 〇〇 / 〇〇 / お〇 / おたま / おまん / おまめ / おひの / おいぬ / おひ〇 / おさる / おたら / お〇つ / おま〇 / 〇〇 / お〇 / 〇〇 / お〇 / 〇〇 / 〇つ〇 / おさつ
7	おひめ おいぬ / おたね おつふ / おたま おまた / おたへ おつし / おな おつま / おみち おたつ / おまち / おたけ
8	仁兵衛 / 庄兵衛 / 伊兵衛 / 次兵衛 / 九兵衛 / 忠兵衛 / 〇右エ門 / 〇右エ門 / 次左右エ門 / 〇兵衛 / 清左エ門 / 〇平 / 〇五良 / 七兵衛
9	重兵〇 傳兵衛 / 十良兵衛 山三郎 / 勘兵衛 大沢 (長?) 兵衛 / 〇右門 傳左右門 / 半兵衛 重〇〇 〇右門 政右門 / 帝釈院 湯浅三良兵衛 / 七郎兵衛 安兵衛 / 市左右門 武右門 / 忠兵衛 金三郎
10	己之助 / 〇助 / 辰之助 / 〇〇〇 / 〇之助 / 〇之助 / 丑之助 / 三十人
16	願主又七 / 久五良 / 佐平治 / 長藏 / 半次良 / 左七 / 元次良 / 長助 / 〇代 / 源次良 / 磯八 / 崑八 / おりん
19	尾崎願主 / 三良左エ門 / 治良右エ門 / 縫之助 / 太良兵エ / 治良兵エ / 治左エ門 / 茂左エ門 / 五右エ門 / 喜左エ門 / 武左エ門 / 小平治 久左エ門 / 新左エ門 / 嘉兵エ / 花輪 市良兵エ / 金左エ門 / 清左エ門 / 庄兵エ / 尾崎 伴右エ門 / 又右エ門 / 市右エ門 / 嘉左エ門 / 六右エ門 / 長右エ門 / 仁左エ門 弥左エ門 / 九良左エ門 / 八良左エ門 / 治右エ門 / 金左エ門 / 新五右エ門 / 新藏 / 喜兵エ / 治兵エ / 忠兵エ / 治左エ門 / 籙左エ門
24	高本村講中 / 治郎右エ門 / 市左エ門 / 長右エ門 / 五兵エ / 四郎右エ門 / 傳二郎 / 三左エ門 / 七郎兵エ / 常右エ門 / 寺基村 / 藏之助 / 助右エ門 / 久右エ門 / 権左エ門 當村 / 治郎右エ門母 / 市左エ門母
40	長太郎 / 辰之助 / 丑之助 / 七之助 / 長十郎 / 幻永童子 / おいわ / 六之助 / 七之藏 / 己之助 / 長吉

写真



No.1



No.2



No.3



No.4



No.5

